

重い皮膚病を患った男 —その κηρύσσειν の内容と意味—

菅原裕治

本論文の目的は、「マルコによる福音書」に登場する脇役の一人、第1章40～45節の「重い皮膚病を患った男」の物語について考察し、特に彼の行動(κηρύσσειν)の内容と意味について探求することにある。

最初にこの物語にある言葉とその訳語について確認する必要がある。まず「重い皮膚病」という言葉についてであるが、従来の日本語訳聖書では、ギリシア語 λέπρα を「らい病」、λεπρός を「らい病人」と訳出してきた。また多くのギリシア語辞典でもこの訳語が用いられている。このギリシア語 λέπρα から派生した英語の leprosy、ドイツ語の Lepra などの現代語も、ほとんど全ての辞書において「らい病」または「ハンセン病」という訳語を採用している。しかしながら、聖書の場合は、その訳語を用いることは必ずしも適切ではない。まずギリシア語の λέπρα は、現在その発病の原因も治療の方法も明らかになっている病名「ハンセン病」に限定されず、各種の皮膚病を意味する言葉だからである。また旧約聖書のギリシア語訳である「セプチュアギェンタ」では、שַׁרְיָט の訳語として λέπρα を用いており、当然「マルコによる福音書」でもそれを前提としていると思われるが、この שַׁרְיָט も「ハンセン病」には限定されず、鱗癬性の皮膚病全般を表す言葉である⁽¹⁾。それ故、本論文においては、「重い皮膚病」及び「重い皮膚病を患った男」という表現を用いる。しかし、これは、訳語の違いであって、その言葉が意味する皮膚病を患った人が、ユダヤ教の律法によって汚れていると認定され、他の人々と接触することを厳しく禁じられたという事実には変わりはない⁽²⁾。

次に本論文の考察対象でもある「κηρύσσειν」についてであるが、この言葉は、マルコによる福音書において12回用いられている⁽³⁾。この個所に限定して言えば、多くの日本語訳聖書では通常「言い広める」と訳している⁽⁴⁾。この言葉の元来の意味は、この何らかの情報を広く伝えるという動作、ある

いは伝令のように何かを伝えるというものであり、この訳語は、不適切なわけではない。しかしながら、この言葉は、キリスト教にとって重要な意味を持つ「宣教する」あるいは「宣べ伝える」とも訳され、イエスや使徒の行動に関する場合は、この訳語が用いられているのである⁽⁵⁾。すなわち、どのような訳語を当てはめるかに、すでに解釈が含まれているのである。我々の論文の目的は、その語についての解釈を行うことであり、また訳語の決定は本論文の結論とも深く結びつく。それ故、重い皮膚病を患った男の動作に関しては、結論に至るまで原語のまま表記していきたい。但し、その他の聖書の引用などは、私訳を除いて、基本的には『新共同訳』を用いることとする。

物語の位置

さて、この物語は、マルコという物語全体の中で、どのあたりに位置しているのだろうか。また前後関係はどうであろうか。位置について確認すると、これは極最初の方に含まれる。それまでの物語の流れをまとめると以下ようになる。ヨハネによる悔い改めの洗礼の宣べ伝え(κηρύσσειν)を含むプロローグの後(1章1～13節)、イエスによる神の国の宣教(κηρύσσειν)が始まる(1章14, 15節)。四人の弟子召命の後、イエスは、カファルナウムという町で、最初の奇跡を行う。すると、イエスの評判が、ガリラヤ地方の隅々にまで広まった(1章21～28節)。次にイエスは、弟子のシモンのしゅうとめの病気を癒す。すると、人々が多くの群集が病人や悪霊に取りつかれた人を連れて集まって来たと言われる(1章29～34節)。イエスはその後、一時人里離れた場所で一人祈っているのが、シモンとその仲間に見つけ出され、「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する(κηρύσσειν)。そのためにわたしは出て来たのである。」(38節)と語るのである。このイエスの言

葉は、読者に対して彼自身の行動の目的を明確にしている。そして次の語り手の説明「そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し(κηρύσσειν)、悪霊を追い出された。」(39節)によって、その宣教の内容と一定期間の達成が報告されるのである。この38、39節は、要約的報告である。すなわち、様々な病気の癒しと悪霊追放が、具体的に描かれた物語以上に、回数及び時間を含めて数多く行われたことを読者に深く印象付けているのである⁽⁶⁾。

我々の物語の前に語られた一連の出来事の中には、三つの重要な点がある。一つは、イエスのもとに数多くの人々が集まり、イエスはそのような中で大勢の人を癒し、多くの悪霊を追い出したこと、次に、そのイエスの宣教活動が、具体的な地名、ガリラヤ地方、あるいはその中にあるカファルナウムという町が記されていることである。最後に、本論文の考察対象である、κηρύσσεινという言葉が、バプテスマのヨハネについての語り手の説明とイエスの発言と語り手の説明の中に用いられていることである。この物語は、そのような一連の出来事の後、一旦物語の流れに一区切りをつける、要約的報告の後に続いている。

それでは我々の物語の後にはどのような流れがあるだろうか。2章1節からは、イエスの奇跡物語と敵対者との論争物語が3章6節まで続く。それは明らかに一つのまとまりをなしている。我々の物語は、その位置と前後関係だけを見ても、非常に突出している印象を読者に与えるのである。

物語のつながりと重い皮膚病を患った男の登場の仕方

我々の物語が突出した印象を与えるのは、更にこの物語のつながり方、言いかえると重い皮膚病を患った男の登場の仕方にも関連している。それは非常に唐突である。語り手は、40節で「さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、『御心ならば、わたしを清くすることがおできになります』と言った。」と物語をつなげる。「さて」(καί)は、マルコ福音書で数多く用いられる接続詞である。日本語訳では「イエス」が補われているが、直訳すれば単に「彼」である。重い皮膚病を患った男は、要約的報

告の後、突然彼の前に現われ、跪いて願うのである。ギリシア語は、あまり固有名詞を連続して表記しないのが特徴ではある。しかし、同じように要約的報告である1章28節に続く29節のつながり方と比較すると、かなり異なっていることが分かる。そこにおいては、29節の「一行は会堂を出て」という言葉が、間にある要約的報告を超えて、物語の結びつきを明らかにしている。「一行」という言葉は、特定の主語を持たない三人称複数であるが、文脈がそれを明確にしている。すなわちイエスと四人の弟子たちである。またその言葉は単に結びつきを明らかにするに止まらず、21節において、ガリラヤ、カファルナウム、会堂と、地理的表象と具体的な建物名を用いたと時と同じように、会堂からシモンとアンデレの家と特定の場所に焦点を当てながら物語を続けているのである⁽⁷⁾。

しかし、我々の物語にある40節にはそのような言及はなされていない。イエスとの出会いが、いつどこで起こったのか、また他に誰がいるのかなどの情報が全く与えられていないのである。また男についても説明も、単に重い皮膚病を患った男(λεπρός)とあるのみである。この男の名前やどのような男であるか、それまでどのような生活をしてきたのか、何故イエスのことを知っていたのかなどの説明もない。但し、最後の事柄に関しては、1章21～28節の出来事で広まったイエスの噂を耳にしたことが推測される。

語り手は、この唐突なつながり方と男を何の説明もなしに登場させることによって、それまでの物語の流れとは異なる深い印象を読者に与えている。また同時に、この短い節からどれだけのことを、読者が想像できるかあるいは出来ないかを念頭のおいているとも言えるのである。すなわち、重い皮膚病を患った男(λεπρός)という言葉から、どれだけ詳細な情報を読者が想像できるか、いわば読者の理解あるいは知識に委ねているといえるのである⁽⁸⁾。

ユダヤ社会における重い皮膚病についての事柄、すくなくともレビ記13章14章を全く知らない読者にとっては、この想像は極めて困難であり、この唐突さは、混乱を招くだけかもしれない。それでも唐突だという印象は残るだろう。しか

し、語り手は、そのような読者を想定していないと思われる。語り手が想定しているのは、多い皮膚病と律法及び社会との関係を知っている読者である。すなわちそれを患った人は、汚れているとされ、社会から疎外され、孤独に生きている。そしてその社会に復帰する復帰のためには、祭司の綿密な調査と証明を必要とする。そのような社会状況についての知識を持った読者を、語り手は想定しているのである⁽⁹⁾。

我々は、語り手が想定している読者と全く一致しているわけではないが、我々も、この物語を探求しようとする限り、彼について推測することを求められているのである。この名もない男は、いつ重い皮膚病にかかったかは分からないが、それ以後は、他の人との接触を禁じられているのである。当然、仕事や結婚という社会生活から排除されている。彼がすでに何度か祭司に体を見せたのか否か、また清めの証明を拒否されたかどうか、そこから祭司を信用せずに、イエスを信頼したかどうかということまでは分からない⁽¹⁰⁾。しかし、彼がイエスに自分の清めを行う力があると確信したことは確かだろう。

マルコの物語は、重い皮膚病の人が町や村の中に住んでおり、決して隔離されてはいなかった可能性を示している⁽¹¹⁾。しかし、他人との接触を禁じられている以上、その行動についてはかなりの制約があったと思われる。つまり常に他に人のいない場所で孤独に過ごしていたのである。イエスの噂が広まり、イエスもガリラヤ中の町や村を巡回する。しかし、イエスの周りに数多くの人が集まれば集まるほど、彼はそこに出向くことが出来ない。彼はそのようなジレンマに悩まされたと考えられる。もしそうだとすれば、この男は、ようやく人里離れたところに一人でいるイエスに出会うことができたといえるだろう。イエスがそのような行動をとることは、すぐ前の物語、1章35節で明らかにされているからである。

イエスが望む

彼は、イエスの前にひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」(40節)と語る。跪くことは、請願者としての態度である。彼の言葉、「御心ならば」は、直

訳すると、「もしあなたが望むならば」となる。これは、イエスへの信頼を示すと同時に、イエスの意思が、その治療能力に深く結びついていることを、彼が認識していることを示している⁽¹²⁾。するとイエスは、「深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、『よろしい。清くなれ』と」語るのである(41節)。「深く憐れむ」(σπλαγχνίζομαι)は、マルコの物語では、イエスの動作に関する場合のみ用いられる言葉である。語り手は、この表現によって、イエスが激しく心動かされたという心理描写を示している⁽¹³⁾。大多数の写本がこの言葉を支持しているが、若干は「憤って」(ὀργισθεῖς)を用いている。この箇所は、マルコ福音書の解釈で常に問題となる箇所であるが、「深く憐れんで」とするのが適切であろう⁽¹⁴⁾。「深く憐れむ」とは、自分は安全地帯にいて、そこから困っている人に対して同情するような哀れみではない。日本語では適切な訳語が無いが、腸がちぎれる思い、苦しんでいる人と、同じ地平に立って共に苦しむことを伴った憐れみである。イエスは腸ちぎれる思いに駆られ、手を伸ばして彼に触れるのである⁽¹⁵⁾。祭司ではないイエスが、汚れているとされる重い皮膚病の男に触れることは、それ自体律法違反であり、またイエス自身も汚れたことになる。イエスのこの行為は、奇跡が起こる前に、イエスが祭司以上の存在であることを読者に示しているのである。

それからイエスは、「よろしい。清くなれ。」と語る。それを直訳すると「私は望む。清められよ」である。すると、「たちまち重い皮膚病は去り、彼は清くなった」のである。神が与えた律法は、重い皮膚病を患った人を汚れとして、清められるまで他の人々との接触を禁止した。また重い皮膚病は、神の罰とも考えら得る箇所もある(「民数記」12章9節、「列王記下」5章27節、15章5節)。それは逆にいえば、神ならばそれを取り除くことが可能だということである。もちろん、その神の代理人は祭司たちであった。しかし、イエス時代の祭司たちの役割は、第三者として、それが皮膚病であるか否か、あるいは治療し清められたか否かを確認することであって、清める行為それ自体ではない。しかし、イエスは、彼から重い皮膚病を取り去り、清めることが出来た。それは、イエス

が望んだことであり、イエスが望むこととは、神が望むことと同一であることを示しているのである⁽¹⁶⁾。

イエスの彼への命令

しかし、この清めの出来事の後に続く語り手の説明とイエスの言葉は、読者を混乱させる。「イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、言われた。『だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい』(42節、43節)。語り手は、「イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して」と説明する。「彼を立ち去らせる」を直訳すれば、「追い出す」であり、激しい行動を意味する。また「厳しく注意する」は、直訳すれば、「息巻いてがみがみ注意する」あるいは「唸り声を上げる」である。この文全体を直訳すれば、「それから彼は息巻いて彼にがみがみ注意した後、すぐに彼をそこから追い出した」という激しい怒りを伴った行動であると考えられる⁽¹⁷⁾。

語り手によるこのイエスの心理描写は、一体何を意味するのであろうか。ここでは先に触れた41節での写本の異読を採用した時と同じ問題がここでも派生する。しかし、我々は、41節と同様に、この語り手によるイエスの怒りに関する心理描写を、何らかの事柄に対する怒りとしては解釈しないのである。我々は、このイエスの彼に対する激しい行動を、復活までメシアであることを秘密にしようとしたメシアの秘密としても、あるいは秘密に奇跡を行う奇跡行為者の特長としても⁽¹⁸⁾、清められた男がその喜びに浮かれて言いふらすことをイエスが予期してそうしたとも⁽¹⁹⁾、あるいは、この男に対して何もしなかった祭司たちに対する怒りとも考えないのである⁽²⁰⁾。我々は、単純にその後続くイエスの言葉を強調するために、語り手はこのような激しい表現を用いたと考えるのである⁽²¹⁾。言い換えれば、奇跡の後に、イエスが彼へ命令したという印象を与えるために、このような表現を用いていると考えるのである。

もしイエスの言葉を彼に対する何らかの命令だと考えると、その内容は何であろうか。イエスの彼に対する命令は、43節のイエスの言葉と42節

の語り手の説明を加えれば、五つある。①すぐに立ち去ること、②誰にも何も話さないこと、③自分自身を祭司に見せること、④モーセが定めたものを清めの儀式のために捧げること、⑤人々に証明することである。②の誰にも何も話さないことは、奇跡を秘密にするという意図も考えられる。しかし、命令はそれだけではないし、それだけを強調すると③自分自身を祭司に見せること、⑤人々に証明することと矛盾してしまうのである。

これらのイエスの命令は、「レビ記」に記されている重い皮膚病の清めについての事項に基づいている。すなわち、律法の規定通りに重い皮膚病の清めを完成することを厳しく命令しているのである。「汚れ」及び「汚れた者」という概念、あるいは「清い」及び「清められた者」という概念を規定しているのは神の与えた律法である。もちろん、その律法によって彼は苦しめられたのであるが、イエスは、その律法通りに「清い」「清められた者」と判断してもらうように体を祭司に見せなさいと命じているのである。この時、「人々に」という言葉は、文字通りには「彼らに」である。これを「祭司たち」と考えるか「一般の人々」と考えるか決定することは困難である⁽²²⁾。しかし、45節にある「人々」(特定の主語を持たない三人称複数、この場合は動詞語尾変化に含まれている)に呼応すると考えれば、彼の周囲にいた一般の全ての人々と考えられる。つまり、群集、祭司、律法学者など、様々な登場人物が含まれるのである。イエスは、律法の規定通りの手続きを踏み、祭司に清いと認めてもらい、今まで彼が一緒にいることを許されなかった全ての人々の中で公然と暮らしなさいと命じているのである。それは、社会への帰還命令と言える。

イエスは、何故このように律法を遵守し、社会へ戻ることを彼に厳しく求めるのであろうか。語り手は、答えを与えていない。しかし、このイエスの言葉を、命令であるかのように強調すること、読者にイエスの意図を想像させようとしていると思われる。この時点では明らかでになっていないが、マルコという物語は、読み進んでいくと、何度も律法とその解釈者たちを批判するイエスの姿を示すようになる。律法の遵守を求めているこのイエスの姿と、それらのイエスの姿とは矛盾

するように思える。しかし、そうではない。何故ならば、イエスの彼に対する厳しい命令は、律法批判のため、あるいは律法の解釈者たちへの批判ではなく、他ならぬ律法で苦しめられた彼のためだからである⁽²³⁾。確かにマルコという物語が示すイエスは、清いと汚れを明確に区分する律法に対する批判、特に第三者的な立場でそれを解釈する者たち(律法学者、祭司)に対する大きな批判を持っていると言える。しかし、それに対する批判を具体的に行うのは、イエスと彼に従う人々の職務である。イエスは、彼にそこまでのことを求めなかったということであろう。少し情緒的な言い方をすれば、それは、イエスの「優しさ」であろう。

彼の反応

それでは、イエスの命令を受けた彼の反応はどうであろうか。語り手は、「しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、κηρύσσεινを始めた」(45節a)と彼の行動を説明する。彼は、5つのイエスの命令に対して、①立ち去ることにしか従わなかったのである。⑤の証明するに関しては、内容を変更して行っている。自分の清めの証明ではなく、イエスについての証明である。しかし、語り手は、何故彼が、イエスの命令を無視してそのような行動をとったのかについては一切説明していない。ここでも語り手は、読者の想像を求めているのである。

但し、語り手は、彼の行動の結果については報告している。「それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のない所におられた。それでも、人々は四方からイエスのところに集まって来た」(45節b)である。しかし、この結果報告は、何故彼がこのような行動したのかについての説明にはなっていない。確かに、彼の行為は、誰と特定できない多くの人々(彼ら・特定の主語を持たない三人称複数)を更にイエスのもとへと集める効果があった。しかし、それだけでは、彼の行動が、何らかの意図があったことなのか、あるいは単なる出来事の言い広め、噂をいひ広めたに過ぎないのかを確定することは出来ないからである。

5つの命令の内、一つしか実行しなかったとい

うこと、そしてその行動の結果にも明確な評価が語られていないことを考えると、彼の行動にイエスに対する否定的な印象があることは否めない⁽²⁴⁾。そしてそこから彼についての否定的な想像あるいは評価を下すことも可能である。すなわち、彼はイエスの奇跡を起こす力にのみに注目し、イエスが語った福音を理解していたわけではなく、結局律法すらも守らなかったというような評価である。そのような解釈は、マルコという物語における群集を否定的に解釈することと質的に同じである。すなわち、群集は、イエスに教えら、また奇跡を目撃し喜ぶが、イエスを誤解していて完全には理解しておらず、自分たちの求めるメシアと違うことが分かったと、最終的にイエスを十字架につけることを求めたというようなものである。しかし、マルコの群集は、そのように一面的には描かれてはいないのである⁽²⁵⁾。また弟子と群集とを比較し、たとえ群集を否定的に評価したとしても、そのことは、この男の行動が、群集たちとも異なることを示す結果を生み出すのである⁽²⁶⁾。我々は、彼の行動を、必ずしも否定的に想像する必要はないと考える。

そのように考えると、我々は語り手の説明の中に、彼の行動を理解するための二つのヒントを見出すのである。ひとつは、「出来事を人々に告げ」にある「出来事を」(τὸν λόγον)という言葉である。そして本論文が探求対象としている「κηρύσσειν」である。

まずὁ λόγοςというギリシア語について考えると、これはロゴスという日本語にもなっている広い意味を持つ言葉である。もちろん、出来事と訳すことに問題は無い。また文脈上、言葉と訳すのは困難の様に思える。何故ならば、イエスから彼が聞いた言葉は、律法の遵守命令と帰還命令に他ならないので、それを彼が告げたとは考えにくいからである。しかし、マルコ福音書での他の用法と比べてみると、他の箇所は全て文脈上「言葉」と訳するのが一番適切な文脈で用いられている。この言葉が「出来事」を意味する可能性があるのはこの箇所だけである⁽²⁷⁾。一つの言葉の意味について、その統計的優勢は必ずしも解釈の決定的な要因にはならない。しかし、その統計的優勢は、これを「言葉」と訳すことの可能性を否定はしてい

ないのである。それでは言葉と訳した場合、どのようになるであろうか。「彼はそこを立ち去った後、大いに κηρύσσειν を始め、言葉を告げ知らせた」である。言葉はかなり突出していて、またかなり不自然である。しかし、語り手はだからこそ、出来事という意味ではなく、その「言葉」という意味から、読者に何かを連想することを求めているのではないだろうか。それは日本語で適切な訳を当てはめれば、「神の言葉」、あるいは「福音」に他ならないだろう。すなわち彼は、「み言葉あるいは福音を告げ知らせた」と語り手は読者に連想させようとしている可能性が高いのである⁽²⁸⁾。しかし、そう結論付ける前に、彼の行為「κηρύσσειν」の場合はどうであろうか。

彼は、使徒ではない

彼の行動に関して、我々は否定的に想像する必要がないことは先に見た通りである。それでは、その行為「κηρύσσειν」を即座にキリスト教にとって重要な言葉、「宣教」と捉えることが可能であろうか。この時、大きな妨げとなることは、彼が弟子ではない、すくなくともイエスによって任命された使徒ではないということである。この時点では明らかにされていないが、後に物語は、イエスが弟子の中から十二人を選び、使徒として任命していることを告げている。「イエスが山に登って、これと思う人々を呼び寄せられると、彼らはそばに集まって来た。そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ(κηρύσσειν)、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった」(3章13～15節)。物語は、イエスと共に活動する、あるいは宣教する集団を、登場人物として明確に設定している。彼の物語も、彼の行為「κηρύσσειν」も、その設定がなされる前の出来事である。また後に教会が定めたと考えられる使徒の条件にも、勿論彼は合致していない。彼は、イエスに任命された使徒ではなく、イエスと一緒に行動したわけでもなく、またイエスの十字架や復活の目撃者でもないからである⁽²⁹⁾。

それでは、彼をイエスの弟子と呼べるのであろうか。先の使徒任命の箇所と物語全体の印象は、弟子と使徒が同義語であるかのような印象を与

える。しかし、今日の研究では、弟子をそのような限定的な存在と考えずに、狭義の弟子と、広義の弟子との二つに分けることが一般的である⁽³⁰⁾。狭義の弟子は、12人の使徒であると考えて間違いない。しかし、広義の弟子は、イエスに従い、イエスと共に歩んだ群衆またはその一部をさす。それには、物語では一回しか登場しないが、語り手によってイエスに従ったと説明された徴税人レビ(2章13～17節)、盲人バルティマイ(10章32～34節)など、弟子であることを容易に推測させる脇役たちも存在している。しかし、語り手は、彼の場合には、そのような説明を加えていないのである。それ故、我々は、彼とイエスとの出会いの中で、何が起こったかを推測することが、我々が彼の行為を判断するに大きな要因となる。

彼の物語の重要性

もう一度、彼の行為を確認すると、彼は、出て行って、大いに「κηρύσσειν」を始めるのである。彼は、イエスの命じた通り祭司のところには行かなかったのである。それは、モーセの定めた清めの規定に従わないで、今まで自分に強制されてきた不自由さ、重荷をそのままにしている、自分が汚れているという判断をそのままにしていることを意味する。物語は、「たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった」(42節)と記しているので、彼は肉体的に清められたのであろう。しかし、彼は祭司の診断を受け、その判断を仰いでいない限り、宗教的、あるいは社会的には汚れた者のままだということである。勿論、彼は肉体さえ清められればそれでよいと考えたと想像することも出来るが、それでは、大いに「κηρύσσειν」を始めたこと自体と矛盾する。

我々は、物語の冒頭の部分、彼の「もしあなたが望むならば」という言葉から考えることが必要であろう。この言葉は、重い皮膚病を清めるという行為に対するイエスの主導権あるいは権能を認めていることを意味している。もしイエスが望むならば、イエスには重い皮膚病を清める力があることを彼は認めていたのである。その彼の願いに対して、イエスが彼に対して望んだことは、二つあると物語は示している。第一の望みは、彼が肉体的に清められること、癒されることであっ

た。そして第二の望みは、彼への五つの命令であった。問題は、第二の望み、それが命令であったということにある。命令は、その内容以前に、それに従うか従わないかを求めるのである。つまり、イエスの第二の望みは、彼に自分の行動を選択する自由を与えたと考えられるのである。勿論、彼を汚れた者として疎外したのは律法という法律あるいは倫理であり、それにも守るか守らないか、従うか従わないかという要素はある。しかし、それが法律あるいは倫理である限り、それを遵守しない者は、その社会では生きられないことを意味する。イエスの時代のみならず、現代においても、社会から全く離れて、何から何まで全て一人で行って生活することは不可能であろう。つまり、彼は、隔離された状態に甘んじる以外、何の選択の自由もなかったということである。しかし、イエスは、彼の重い皮膚病を清め、そして命令することによって、行動を選択する自由を与えたのである。

勿論、彼には、イエスの命令通りに実行する自由もあった。祭司に体を見せ、一定の期間の後、献物をし、汚れた人間とされて苦しめられた分、これからは清められた人間として平和に暮らす自由が彼にはあった。しかし、彼はその道を選択しなかったのである。それは何故であろうか。我々は、その理由を、物語が直接示していない、イエスの第三の望みとも呼べるものを彼が悟ったことにあると考えるのである。

イエスの第三の望み

祭司による清めの宣告、それが直接的に示すことは、彼が身体的・社会的・宗教的に清いと宣言することである。そして、それが間接的に示すことは、人間を「清い」と「汚れ」で分離する境界線を挟んで、彼が「汚れた側」から「清い側」へ移行するということである。言い換えれば、苦しめられる側から、苦しめる側に移行することを意味するのである。自分の肉体から重い皮膚病が去った瞬間、今まで自分が苦しめてきたその皮膚病の重み、それをからだで知っているが故に、今度は自分が苦しめる側に立つことの無意味さ、それを彼が悟ったということ、十分に想像できると思われる。もしそうであるならば、汚れたとされ

た人が隔離され苦しめられる一方で、清いとされている人が平穩無事に暮らしている世界に対して疑問を持ち、そのような世界がもはやイエスの到来によって終わったこと、そのことをも悟ったと言えるのである。自分のからだはその何よりの証拠である。それ故にそのような世界の終わりを告知することが、イエスの第三の望みであると考えられるのである。

そこから示されることは、どんな重荷を背負ってでも自分のからだを証拠として提示しながら、イエスについて語ること、イエスの到来によって始まった世界について語ること、それが彼の「κηρύσσειν」の内容だということである。それは、イエスと同じ宣教という行為に他ならないといえるだろう。現在、多くの注解者が、その理由は異なるにせよ、彼の行為が弟子よりも先に行われた宣教であると考えている⁽³¹⁾。マルコの物語は、イエスについて最初に宣教した者は、使徒でも弟子でも群集でもなく、この重い皮膚病を清められた男であると伝えているのである。

彼の行為の意味

彼は、宣教をした後、マルコという物語から消えていく。それは、マルコという物語に印象深く登場する脇役の特長である⁽³²⁾。つまり、物語は、彼がその後どうなったのかについては何も語らないのである。ただ、暗示していることは、彼が祭司による清めの宣告を受けずに宣教を続ける限り、彼の重荷も大きくなり続けるということである。彼が生きるマルコという物語世界の中では、律法の清いと汚れの区分はまだ有効であり、彼はその世界の現実では汚れたままだからである。また彼の宣教は、多くの人々をイエスのもとへと集めましたが、彼がからだを証拠として行う宣教の内容が、群集に伝わり理解されたかどうかの報告はなされない。それは、物語世界を越えて、読者の現実の世界でも、清いと汚れの区分が存在し、彼がまだ汚れたままであることを暗示しているのである。

マルコという物語は、イエスの宣教の完成を、その十字架と復活にみている。そこからキリスト教・教会の宣教が始まったと考えることは、マルコ福音書の「歴史的読者」⁽³³⁾にとっても周知の理

解であっただろう。しかし、だからこそ、彼の行為の意味は、最初に宣教をした者ということだけには止まらないのである。彼の行為は、それをどう受け止めるかを物語の読者に迫るのである。宣教とはいかなるものかと考えているかを、読者に迫るのである。すなわち、彼の行為の意味は、その物語に触れる者に、常に宣教とは何かという疑問を突きつけ、物語に触れた者が、何をさして宣教と考えていたのかを明らかにするのである。それは、歴史的読者を越えて、まさに暗示的読者に突きつけられている事柄、現代の読者にもつきつけられている事柄に他ならないのである。

注

- (1) パーキンス, P. 他著、『NIB 新約聖書注解 2』、挽地茂男訳、2000年、ATD・NTD新約聖書注解刊行会、188頁以下、エプシュタイン, W. 著、『新約聖書とタルムードの医学』、梶田昭訳、1990年、時空出版、243頁。また、『新共同訳』聖書の旧約は、最初から「重い皮膚病」と訳出しており、新約においても1997年以降「重い皮膚病」に訳出されるようになった。
- (2) クロッサン, J. D. 著、『イエス あるユダヤ人貧民の革命的生涯』、太田修司訳、1998年、新教出版社、133頁以下。デン・ヘイヤール, C. J., 『コンパクト聖書注解 マルコによる福音書 I』、伊藤勝啓訳、新教出版社、1996年、78頁以下。Guelich, R. A., *Word Biblical Commentary Mark 1-8: 26*, Word Books, Publisher, Dallas, Texas, 1988. p.73. 重い皮膚病について律法の規定は、「レビ記」第13章と第14章。
- (3) 「κηρύσσειν」のマルコでの用例は、16章9節以下の長い終わりを除くと以下ようになる。バプテスマのヨハネの行動として(1章4節、7節)、イエスの行動として(1章14節、38節、39節)、弟子たちの行動として(3章14節、6章12節)、教会の行動として(13章10節、14章9節)、イエスと出会った人々の行動として(1章45節、5章20節、7章36節)。
- (4) 日本聖書協会の『新共同訳』では「言い広める」、それ以前の訳である『協会訳』でも「言いひろめる」が用いられている。また『新改訳』でも「言い広める」が用いている。『新約聖書翻訳委員会』のみがそれらとは異なり「宣べ伝える」を用いている(新約聖書翻訳委員会・佐藤研訳、『新約聖書 I マルコによる福音書 マタイによる福音書』、岩波書店、1995、1997、8頁)。同じ言葉を、1章38、39節のイエスの場合は、「教えを宣べ伝え」(『口語訳』)、「福音を告げ知らせ」(『新改訳』)、「宣教する」(『新共同訳』)。使徒の場合、「宣教」(『口語訳』)、「福音を宣べる」(『新改訳』)、「宣教」(『新共同訳』)。また、注解書の私訳などを除き、教会で用いられる英語やドイツ語の聖書での場合も同じことがいえる。1章45節は、「publish it much,」(*King James Version of the English Bible* (KJV)、*The Holy Bible, American Standard Version* (ASV)、*The New American Standard Bible* (NAS)、*New Revised Standard Version of the Bible* (NRS)、*New King James Version* (NKJ))、「began to talk freely about it」(*The Holy Bible, Revised Standard Version* (RSV))。イエスと使徒の場合(1:38, 39, 3:14)は、「preach」(KJV, ASV, NAS, NKJ)。「proclaim the message」(RSV)。ドイツ語でも「hob er an und sagte viel」(*The German Luther Bibel*)、「Er aber ging weg und fing an, es viel kundzumachen」(*The German Darby Elberfelder of 1905*)。イエスと使徒の場合は、「predigen」。
- (5) 田川建三著、『マルコ福音書上巻』、1972、新教出版社、107頁。Kittel, G. editor, *Theological Dictionary of the New Testament vol.3*, trns. G. W. Bromiley Michigan, 1965, pp.697。
- (6) 大貫 隆著、『マルコによる福音書』、1993、日本基督教団出版局、78頁以下。
- (7) von Iesel, B.M.F., *Mark, A Reader-Response Commentary, JSNTSup.164*, Sheffield, 1998. p.139。
- (8) von Iesel, B.M.F., *ibid.* p.142。

- (9) マリーナ, B., ロアポー, R. 著、『共観福音書の社会科学的注解』、大貫隆監訳、加藤隆訳、2001年、日本基督教団出版局、213頁。
- (10) パーキンス, P. 他著、『NIB新約聖書注解2』、188頁
- (11) パーキンス, P. 同書、189頁
- (12) マルコ14章3節(マタイの平行箇所26章6節)にある「重い皮膚病のシモンの家」とある。またルカ5章12節、17章12節では、村や町に、重い皮膚病を患った人がいたことを示している。イエス時代の重い皮膚病に関する疎外は、必ずしも隔離政策のようなものではないと思われる。
- (13) パーキンス, P. 他著、『NIB新約聖書注解2』、188頁。Guelich, R. A., *Word Biblical Commentary Mark 1-8: 26*, p.73.
- (14) Fowler, R.M., *Let the Reader Understand Reader-Response Criticism and the Gospel of Mark*, 1996, Harrisburg: Trinity Press International, p.123, Smith S.H., *A lion with wings A Narrative-Critical Approach to Mark's Gospel*, BS. 38, Sheffield, 1996, p.53, Barbieri, L., *Moody Gospel Mark Commentary*, Moody Press Chicago 1995 p.56.
- (15) 本文批評の外的評価の原則から言えば、確かに、イエスが、癒しを求める人に対して「深く憐れんで」という分かりやすい文章を、「憤って」という難解な文章に変えるよりも、元来「憤って」であったものを「深く憐れんで」に変える可能性の方が高い。つまり「憤って」の方がオリジナルである確率が高い(川島真雄著、『新共同訳 新約聖書注解I』、1991年、日本基督教団出版局、175頁)。またその方が内容的にも43節の「厳しく注意して」とも呼応すると考えられる。しかし、「憤って」を採用した場合、我々は納得する解釈を認めるのは困難である。文字通りにとれば、人に近寄るなという律法で禁じられた行為を破っているこの男に対する、イエスの怒りがまず考えられるが、その可能性はほとんどないであろう。その他は、メシアの秘密として43節と呼応させる(Wrede W., *Das Messias-*
- geheimnis in den Evangelien*, Göttingen, 1901. p.35-36)、病気や悪霊などに対するイエスの怒り(Taylor, V., *The Gospel According to St. Mark*, London, 1966. p.188, Lane W. L., *The Gospel of Mark*, William B. Eerdmans Publishing Company, 1974. p.84-86. Hooker M.D., *The Gospel According to St Mark, Black's New Testament Commentaries* London, 1991 p.79-80, Cranfield, C. E. B. *The Cambridge Greek Testament Commentary The Gospel According to ST Mark*, Cambridge, 1959 1997, p.92)、祭司たちへの批判(パーキンス, P. 他著、『NIB新約聖書注解2』、187頁)などが考えられる。しかし、「深く憐れんで」という言葉は、8章2節(群衆に対するイエスの心的描写として)と9章22節(霊に取りつかれた子の父親からのイエスへの発言として)でも用いられている。この箇所は、「深く憐れんで」を採用することが内容的にも最も適切であろう。
- (16) 新約聖書翻訳委員会・佐藤研訳、『新約聖書 I マルコによる福音書 マタイによる福音書』、8頁。
- (17) デン・ヘイヤール、C. J., 『コンパクト聖書注解 マルコによる福音書 I』、80頁。
- (18) Lane W. L., *The Gospel of Mark*, p.85, Gundry R. H., *Mark A Commentary on His Apology for the Cross*, Michigan, 1993, p.96.
- (19) Wrede W., *Das Messiasgeheimnis in den Evangelien*, p.35-36, Galand D. E. *The NIV Application Commentary Mark*, Michigan 1996. p.76-77.
- (20) von Iesel, B.M.F., *Mark, A Reader-Response Commentary*, p.143.
- (21) パーキンス, P. 他著、『NIB新約聖書注解2』、189頁。
- (22) Gundry R. H., *Mark A Commentary on His Apology for the Cross*, p.96.
- (23) 祭司たちと考える: Lane W. L., *The Gospel of Mark*, p.88、大貫隆著、『マルコによる福音書』、1993、日本基督教団出版局、92頁

- 以下、デン・ヘイヤール、C. J.、『コンパクト聖書注解 マルコによる福音書 I』、83 頁。一般的な人々と考える：Gundry R. H., *Mark A Commentary on His Apology for the Cross*, p.103, Hooker M.D., *The Gospel According to St Mark, Black's New Testament Commentaries*, London, 1991, p.82.
- (23) 滝沢武人著、『マルコの世界 イエス主義の源流』、79 頁。
- (24) Williams, J. F., *Other Followers of Jesus, Minor Characters as Major Figures in Mark's Gospel*, JSNTSup.102, Sheffield: JSOT Press, 1994. p.98.
- (25) この類の民衆理解は、主に「ルカによる福音書」の群集像である（田川建三著、『原始キリスト教史の一段面』、勁草書房、1968 年、128 頁以下）。ルカはこの物語の平行箇所、彼の行動から κηρύσσειν を削除している。またルカ 17 章 11 節以下の物語では、イエスに清められた 10 人の重い皮膚病を患った人たちの内、神を賛美するために戻ったのは一人だけであったと言う物語を示している。我々は、このルカの群集理解をマルコの物語に投影することは出来ない。
- (26) Best E., *Mark The Gospel as Story*, Edinburgh, 1983, pp.116.
- (27) イエスの言葉として（2 章 2 節、4 章 33 節、8 章 32、38 節、9 章 10 節、10 章 22、24 節、11 章 29 節、13 章 31 節、14 章 39 節）、譬の解釈における御言葉として（4 章 13、14、15（2 回）、16、17、18、19、20 節）、シリア・フェニキアの女の言葉として（7 章 29 節）、会堂長の家から来た人々の話として（5 章 36 節）、弟子たちの言葉として（16 章 20 節）。
- (28) 田川建三、『マルコ福音書上巻』、114、115 頁。
- (29) 「使徒言行録」11 章 21～22 節。
- (30) 大貫 隆著、『マルコによる福音書』、243、244 頁。
- (31) 川島貞雄、『十字架への道イエス〈福音書のイエス・キリスト 2、マルコによる福音書〉』、講談社、198、65 頁。田川建三、同書、120～122 頁。大貫 隆著、同書、93 頁、
- (32) Rhoads, D., Michie, D., *Mark as story, An introduction to the narrative of a Gospel*, Philadelphia: Fortress Press, 1982. pp. 129.
- (33) Chatman, S., *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film*, Ithaca, 1978, p.181-183.

The Story of a Leper — The Purpose and the Meaning of His κηρύσσειν —

Sugawara, Yuji*

「宣教」という言葉は、キリスト教にとって極めて重要な言葉である。そもそも教会・キリスト教という存在自体が、ナザレのイエスは復活したという宣教から始まったのである。それ故、宣教について何かを規定することは、そのまま教会のあるいは各個人のキリスト者の行動や倫理を規定することに結びつくといっても過言ではない。

本論文は、「マルコによる福音書」においてイエスについて最初に宣教した男についての考察である。その方法は、歴史的・批判的考察ではなく、文学的考察、物語批評的考察である。それ故、何が起きたのかということよりも、どのような意味が、暗示的読者または現代の我々にあるかことのほうに力点がおかれている。本論文の結論は、この物語自体が、物語に触れるものに、ここから宣教について何を汲み取るかを問い掛けているということである。それ故、この物語が問い掛けている事柄とは、過去にそのような言説があったということではなく、新約聖書学という範疇を超えて、現代における宣教あるいはキリスト教倫理を考える時、重要かつ不可欠なものといえるだろう。

キーワード：マルコによる福音書， 宣教， 重い皮膚病， 脇役， キリスト教倫理